# 虎口の調査方法

— 門の構造を明らかにするため、発掘調査を行いました —

**? 土塁の裾付近を調査するのはなぜ**

→門に伴う建造物があるとしたら、土塁に接しているはず！

だから、**土塁の裾部（土塁の立ち上がる部分）に注目**をして調査を行います！

**調査員のこぼれ話…**

勝賀城跡の地山は風化した花崗岩の小礫が多量に含まれています。そのため、盛土と地山の判別が難しく、土のやわらかさや微妙な色調の違いで判別しています。また、花崗岩の小礫が黄褐色で土器と非常によく似た色をしているため、土器と間違えてしまうこともしばしば…

## ① 土塁を半分断ち割る

築城されてから 400 年以上経過しているため、土塁の土砂が流れていることが想定されます。

土塁を半分断ち割り、土層から土塁の裾を確認！

そのため、まずは土塁の裾を土層で確認しました。

土層をみて、土塁の裾を見極める

## ② 土塁の裾部を発掘

土塁の裾を確認後、土塁の裾と考えられる場所に調査区を設定し、発掘を行いました。

土塁の裾に調査区を設定し、発掘！


**勝賀城跡 — 巻の一 —**

編集 / 高松市教育委員会
〒760-0017
高松市番町一丁目５番１号
創造都市推進局文化・観光・スポーツ部文化財課
高松市埋蔵文化財センター（087-823-2714）
発行 / 平成 31 年 3 月 21 日

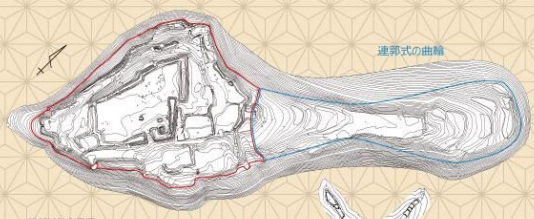

# 勝賀城跡

## — 巻の一 —

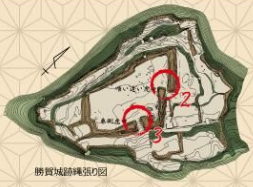
高松市では、勝賀城跡を平成２８年度から調査しています。勝賀城跡は県内でも屈指の縄張りをもち、遺構の残りが非常に良好です。

平成２９・３０年度にかけて喰い違い虎口と東側虎口の発掘調査を行いました。発掘調査で明らかになった虎口の形態について紹介します。

# 勝賀城跡の特徴



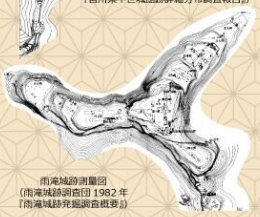

勝賀城跡測量図




勝賀城跡縄張り図

喰い違い虎口 完掘状況

天霧城跡縄張り図
（香川県教育委員会 2003 年『香川県中世城館跡詳細分布調査報告』）



雨滝城跡測量図
（雨滝城跡調査団 1982 年『雨滝城跡発掘調査概要』）

※縮尺は任意

## 1 北と南で異なる構造

勝賀城跡は、勝賀山頂全域にまたがり全長約 340m に及びます。その中で北と南で構造が大きく異なることが分かります。

北（北東）側の曲輪が尾根上に連続して配置される「連郭式」と呼ばれる構造に対し、南（南西）側は土塁で二重に囲まれ曲輪が複雑に配置された構造です。

北側の連郭式は、西讃守護代の香川氏の城である「天霧城跡」や東讃守護代の安富氏の城である「雨滝城跡」などで見られます。讃岐における戦国時代の典型的な山城であったと想定でき、香西氏も同じ連郭式の山城であったと考えられます。

一方南側は、曲輪配置が複雑な構造であるのに加え、喰い違い虎口や方形曲輪、竪土塁など新しい要素の遺構がみられます。そのため南側が中世末に改修された可能性が高いと指摘されています。

## 2 喰い違い虎口

喰い違い虎口は、土塁をずらして折れを数回作り、敵の侵入を防ぐ入口です。

勝賀城跡では、喰い違い虎口の東側に横堀状の段を設け、直線的に侵入されるのを防いでます。

発掘調査では、土塁頂部と裾部に調査区を設定しましたが、門に伴う遺構は検出されませんでした。

東側虎口 完掘状況

## 3 東側虎口

東側虎口は、鉤状土塁と直線的な土塁によって造られた入口です。

長らく平虎口（直線的に侵入できる入口）と考えられていましたが、平成 30 年度の測量調査に伴う清掃により虎口の全面に平場（虎口受け）があることが分かりました。

発掘調査では、土塁頂部と裾部に調査区を設定しましたが、門に伴う遺構は検出されませんでした。